高率補助下の公共工事①

赤土流出 漁業に打撃

「沖縄振興？　海にとって良いことは何一つ無かったんじゃないか」

宜野座村漁協の元組合長で現在も同漁協に所属する仲栄真盛昌さん(61)は、そう話しながら、古く分厚い書類入れを机の上に差し出した。入っていたのは、復帰後から今にいたる沖縄の海岸の赤土汚染に関するアンケートの調査結果、県や自治体に対応を求める要請書や会議内容などさまざまな文書だ。

地元・宜野座村の海岸で漁業を営んできた仲栄真さんは、復帰翌年から海の変化に気付いた。

雨が降った翌日は、陸地や川の上流から赤土混じりの雨水が海岸に流れ出て真っ赤に染まる。そんな日は視界が悪く漁に出られない。数日たつと海は再び青く戻ったが、魚は次第に捕れなくなっていったという。

「最初は、どこに訴えるつもりもなかった。赤土と不漁が関係している証拠も無いし。ただ記録しておこうと思って」

復帰翌年の1973年、仲栄真さんは一人で、カメラ片手に赤土流出の源流をたどり始めた。ダム、農地、道路…。

陸から流れた赤土まじりの雨水がたまる宜野座漁協の駐車場＝1996年4月10日（宜野座漁協撮影）

復帰後、沖縄振興開発計画の下で行われたあらゆる公共工事と米軍基地内で行われる工事が、その先にあった。

88年に設立された宜野座村漁協には、仲栄真さんが撮影してきた赤土流出の証拠写真が数百枚保管されている。70年代後半の写真からは、地元で漁をする仲間も一緒に、撮影や赤土流出調査に加わった様子が写し出されている。

「いまも撮影は続いている。これは昨年の大雨の時のもの」。

そう言って城間盛春組合長(63)は2010年2月15日、陸から流れてきた赤土まみれの雨水が、漁港を真っ赤に染める一枚を指し示した。

ウニ、サザエ、イラブチ、エーグワー、クブシミ、タコ、ガチュン、タチウオ…。

「宜野座の海は復帰前、沖縄で捕れる魚介類なら何でも捕れたのに」と城間組合長。しかし、いつの間にか漁師が漁で生活するのは難しくなったという。「モズク養殖を始めた漁師もいるが、それも赤土で駄目になったりした。どうしようもない」

漁協は、これまで幾度となく、公共事業を実施する村や県に赤土流出対策を要請してきた。最初に声を上げたのは1989年。県道工事に対して漁協の同意を求める依頼書に対し、同工事で赤土防止対策が予算化されているかどうかを問う質問状を提出した。

この間、漁協は再三、公共工事を行う市町村や県に赤土対策の要請を続けている。直近では昨年もダム工事現場からの赤土流出に対策を要請したばかりだ。

「県や市町村は対策をしているというがこの40年、状況はほとんど変わらない。漁業は沖縄振興の被害を受けてばかりなのに、いまでは『工事をすれば赤土が出るのはしょうがない』と開き直る声すらある」。二人は眉をひそめた。

（「沖縄振興」取材班＝黒島美奈子）

この連載は日～水曜日に掲載します。